SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

主観と努力とオースティン

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡大学人文社会科学部 公開日: 2017-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 実佳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010418

主観と努力とオースティン[1]

鈴　木　実　佳

1．はじめに

2017年は、ジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817）の死後200年を迎える。死後100年の際には、彼女が晩年を過ごしたチョートンの家に、英米の人々が協力して、彼女の作品の永遠性を称える石版を設けた[2]。石版設置に協力したのは、「この国とアメリカの称賛者たち」であって、協力者名簿にその他の国の人々はいない。日本では、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ハーン、坪内逍遙、夏目漱石らがオースティンを紹介していたものの、読み物として国内で出版されるのも、翻訳が出版され始めるのも1920年代を待たなければならない[3]。

1917年、第１次世界大戦終盤のころである。その頃のオースティン作品には、個々人が抱える現実の問題にフィクションが解決法を授けてくれるという希望が託され、読むことによって得られる精神的充足のために注目する人々がいた。本を読むという行為が、現実の個人のなかに何を産み出すか、文学は何の役にたつことができるのかということが模索されていたようである。大戦で負った傷や精神的打撃に苦しむ帰還兵士たちが、リハビリのために読むことを勧められたと言われ、キプリング（Rudyard Kipling, 1865-1936）の「ジェイナイツ」（'The Janeites', 1926）は、戦場にあって、ジェイン・オースティン愛読で結ば

[1] 本研究はJSPS科研費（JP15K02296）の助成を受けたものです。

[2] 'Such art as hers can never grow old'. The Jane Austen Centenary Booklet (https://austenonly.files.wordpress.com/2012/06/jane-austen-centenary-brodnax-mmxii.pdf).

[3] 小泉八雲（Lafcadio Hearn, 1850-1904）、夏目漱石（1867-1916）、坪内逍遙（1859-1935）は東京帝国大学、東京専門学校（早稲田大学）などにて教鞭をとって英文学を教え、またそれぞれ著作でオースティンを紹介している。

1915年の和田垣謙三らの『模範英文学』、1923年研究社英文学叢書に、Pride and Prejudiceが収められた。野上豊一郎 訳で、国民文庫刊行会より1926年に翻訳が出版された。

れている秘密結社めいた人々を描いた[4]。

オースティンの死後100年を記念する年の論考から、ファラー（Reginald John Farrer, 1880-1920）によるものを読んでみよう。彼は東洋への旅にオースティン小説を携え、日本にも立ち寄り、その印象を旅行記として出版したが主に植物や庭に関する仕事で名を残している人物である[5]。100年前の論考であって、ただ古めかしく思われる部分もある。しかし、オースティンの死後100年を経て書かれた論文を、それから更に100年経過した今、改めて振り返ってみると、文学が時空を超えて果たす重要な役割の一端を再認識することができる。その論考のなかで、彼はオースティンの普遍性をシェイクスピアと同様にとらえて、天才は具体化と一般化を同時に実現することができると述べている。彼の評価では、彼女は「人間の本性と同じだけの拡がりを有し」、人間と人間社会の本質を問うた。また、「非常に徹底的で変らぬ献身をもって真実を追求する」作家であり、その最高峰は『エマ』であると彼は宣言する[6]。

ファラーが挙げた普遍性の達成を、ここでは個人の意識の焦点化と、主観的見解への警戒に絞って、小説の内外のオースティンの著述を追う。オースティンの小説を読むとき、私たちは、たいてい18世紀から19世紀初頭の特定の時代背景と文化を受容し、理解しようと努める。そこから学ぶことが楽しいからである。しかし、疑問が残ることもある。ブラウンによれば、ボックス・ヒルでの「エマの残酷さはまさに衝撃的なのである」。というのも、彼女の行為が、階級社会で強い立場にいる者が「弱者を守る」という「最も基本的な人間社会の法則に背く」という理由においてである[7]。しかし、エマの世界の階級意識に基づいた弱者保護の価値観を私たちは共有することができているのだろうか。確かに社会階層に根ざした義務や保護を想起し、土地の名士として弱者を守るという役割でこれを理解することはできる。またキリスト教的倫理観で納得し共感することもできる。マッキンタイヤは、ギリシャ及び新約聖書の倫理を継ぐ者としてオースティンを位置づけた[8]。エムズレーは、よりキリスト教的道徳に

---

[4] 'The Janeites' は、雑誌*The Story-Teller Magazine*, May 1924; *Hearst's International Magazine*, May 1924に掲載され、その後キプリングの短編集に収められた。Rudyard Kipling, *Debits and Credits* (London: Macmillan & Co., 1926).

[5] Reginald John Farrer, *The Garden of Asia: Impressions from Japan* (London: Methuen & Co., 1904).

[6] *Jane Austen : The Critical Heritage. Vol. 2, 1870-1940*, ed. B. C. Ed Southam (RKP, 1987), pp. 246-51, 254, 266.

[7] Julia Prewitt Brown, *Jane Austen's Novels : Social Change and Literary Form* (Cambridge, Mass. ; London: Harvard University Press, 1979), p. 102.

[8] Alasdair C. MacIntyre, *After Virtue : A Study in Moral Theory*, 3rd ed. ed. (Notre Dame, Ind.:

重点をおきながら、オースティン作品が古典の伝統とキリスト教的倫理観の統合を表わすと論じている[9]。エムズレーはまた、作品とオースティンの手紙に書かれた内容を使って、『エマ』の中で特に問題になる、個人的な誠実さと、社会の中での個人の振る舞いの間の緊張関係を、「いかに正直にすべきか」と「いかに礼儀を尽くすか」の間の対立と調停の問題としてとらえ、キリスト教的な隣人愛、慈悲心、チャリティーに結びつけている[10]。こうした議論は、十分に説得力がある。しかし、さらにもっと普遍的に読者が共有するもの、あるいは逆に限定的に現代の読者により強く訴えかける要素があると考えてみよう。そのために、まさにキリスト教的な祈りから始め、特定の宗教に依る言葉がいかに普遍的アピールをもっているか、そしてそれが作品でどう使われているかを示すことにする。

II. 祈り

オースティンが著わした祈祷は、私たちが持ちがちな聖職者の娘への期待に違わず、英国国教会の祈祷書から大きな影響を受けている。グランディによれば、彼女が使っていた聖書と祈祷書は1611年、1612年版であり、その格調高い文言のリズムが彼女の祈祷に反映されている[11]。祈祷書との文言の差異は、オースティンの意図的な文言・表現の選択を指し示していると考えられる。

> 口で祈りを唱えるだけでなく、心から神に向き合うことができるよう……恩寵をお与えください。(Austen: 'Give us grace Almighty Father, … to address

---

University of Notre Dame Press, 2007).

[9] Sarah Baxter Emsley, *Jane Austen's Philosophy of the Virtues* (New York ; Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2005), p. 10.

[10] Sarah Emsley, "Laughing at Our Neighbors: Jane Austen and the Problem of Charity," *Persuations on-line* 26, no. 1 (2005)

[11] Isobel Grundy, "Jane Austen and Literary Traditions," in *The Cambridge Companion to Jane Austen*, ed. Edward Copeland and Juliet McMaster (Cambridge: Cambridge University Press, 1997)、p. 195. 他に例えば、Roger E Moore, "Religion," in *Companion to Jane Austen*, ed. Claudia L. Johnson and Clara Tuite (Oxford: Wiley-Blackwell, 2012), pp. 314-22; Jane Austen, *Catharine and Other Writings*, ed. Margaret Anne Doody and Douglas Murray (Oxford: Oxford University Press, 1993), pp. 371-72; Jane Austen, *Later Manuscripts*, ed. Janet M. Todd and Linda Bree (Cambridge: Cambridge University Press, 2008), Appendix D, Prayers, pp. 573-76. また、以下のウエブサイトでも祈祷書と小説の密接な関係が論じられている：http://austenonly.com/2012/08/28/the-350th-anniversary-of-the-1662-book-of-common-prayer-jane-austen-and-the-prayer-book-part-one/; http://austenonly.com/2012/09/02/jane-austen-and-the-book-of-common-prayer-part-two/

thee with our Hearts, as with our Lips.')[12]

The Book of Common Prayer: 'And, we beseech thee, give us that due sense of all thy mercies, that our hearts may be unfeignedly thankful; and that we may shew forth thy praise, not only with our lips, but in our lives;'[13]

オースティンによる祈祷では、まず、口先と心、言葉と真心が、ふたつの異なるものとして設定され、それが一致することにより、恥ずべきところなく神にまっすぐに向かうことが出来るよう、恵みを与えてくださいと願う。一方、『祈祷書』の類似の部分では、神の慈悲を請うて、それにより神を称える言葉を提示し、行動によっても示すことができるように、と請う。前者は、自分の言動に関する認識と、それを律しようとする意思と努力に大きな重点がある。恩寵を与えられることによって得られるのは、神に向き合い、話しかけるための覚悟であり、神に導かれてこそ人は意志をもち、努力することができるが、そこから先は個々の人間の認識と判断による。そして、自分の努力と選択の結果であるから、思考、言動は、反省の対象となる。

May we now, and on each return of night, consider how the past day has been spent by us, what have been our prevailing thoughts, words and actions during it, and how far we can acquit ourselves of evil. … have we … willingly given pain to any human being? *Incline us to ask our hearts these questions* oh! God,

今、そして一日の終わりに、私たちがどのように一日を過ごしたか、どんな考えをもち、言葉を話し、どんな行動をしたか考えることができますように。私たちは、……意図的に誰かに痛みを与えはしなかっただろうか？……こうした問いを私たちの心になげかけるよう、神様、私たちを導いてください[14]。

一日の終わりに、頭の中で起こっていたこと、口にした言葉、とった行動、この三点に分けて自省するというのは、まさに『エマ』で主人公エマが常に意

[12] Austen, *Later Manuscripts*, p. 573; Austen, *Catharine and Other Writings*, p. 371.

[13] *The Book of Common Prayer, Etc*, (Cambridge: John Baskerville, 1762), p. 34; 一七七一年版祈祷書 General Thanksgiving, *The Book of Common Prayer, Etc*, (Cambridge: John Archdeacon, 1771), p. 66. ; 後半部分は次にも引用されている Austen, *Catharine and Other Writings*, p. 371.

[14] Austen, *Later Manuscripts*, p. 573; Austen, *Catharine and Other Writings*, p. 247.

識していることである。そして、「意図的に人に痛みを与えなかったか？」の自問は、ボックス・ヒルでのエマのミス・ベイツに対する言葉の場面を想起させる。思考、発言、行動を素直に相互に結びつけることが、徳や社会のルール、円滑な人間関係に反するときに、どのように自らを律する可能性があるのか考慮することは、『エマ』のテーマとなっていると考えられる。また、「このような問いを自らの心に投げかけるように導いてください」という信仰に根ざした人間の意図的な問いかけと、その問いかけによる自省が促す改善への信頼がここにみられる。第一段階として、思考・感情・行動の方向性を与えてくれるのは信仰であり、それ以降は人間の意思と意識と努力によるものであって、この二段階が想定されている。同じような、恩寵—努力—行動の繋がりは次の箇所にもみられる。

> *Give us grace to endeavor* after a truly Christian spirit *to seek to attain* that temper of forbearance and patience of which our blessed savior has set us the highest example; … *Incline us* Oh God! To thing humbly of ourselves, to be severe only in the examination of our own conduct, to consider our fellow-creatures with kindness, and to judge of all they say and do with that charity which we would desire from them ourselves.
> 真にキリスト教徒らしい精神をもって、私たちの救世主が至高の範を示してくださったような辛抱と忍耐力を得るよう努力するために恩寵をお与えください。…私たちをしむけてください。自分の行動を吟味するときにのみ、厳しくなれますように。同朋のことは親切心をもって考えることができますように。自分の言動が判断されるときに示してもらいたいと思うような、慈悲心をもって同朋の言動を判断することができますように[15]。

自己分析を行う努力に向かう意思を促す神はここでも人間個人の努力を後押ししている。ムアの分析では、オースティン作品には人間が行う努力にたいする信頼が示されており、まさにこのような祈祷からそれが読み取れる[16]。人間の意識活動への信頼は、さまざまな境界を越えた多様な人々に普遍的な訴えかけとなることができる。

---

[15] Austen, *Later Manuscripts*, p. 575; Austen, *Catharine and Other Writings*, p. 249.
[16] Moore, "Religion," pp. 315-16.

III. 個人の意思

恩寵と努力の二段階を想定して、小説には主に第二段階の意識活動を描くことにより、特定の信仰に根ざしながら、彼女の小説はそこに限られない広い読者を満足させるものになり得る。正直と思いやり、真実と礼儀、本心と体裁の齟齬がむきだしになるのがボックス・ヒルの一件であるが、この作品の世界は、高度に意識的、意図的であり、小説の早い段階から、意図的な自己制御が焦点になっている。認識と制御の対象は、言動であり、感情であり、思考である。決意をもって行動する主人公はよくみかけるが、エマの場合、決意をもって行動するばかりでなく、決意をもって考え、発言し、楽しみ、感じるのである。たとえば、「エルトン氏の妙な態度やその他不愉快なことはできる限り考えないことにして、楽しめることを最大限に楽しもうと心に決めていた」というように、自己を対象化して、考えないこと、楽しむことに自らを向かわせる自己操縦がある[17]。

エマがもつ人生を生きる方針は、彼女の傍らにハリエットがいることにより明確化される。ハリエットに教えるという行為により、その方針を明確に言語化することになる。エルトンの真意がわかり、失意のハリエットに、エマは、慰め宥めるというよりも、自己管理を要求する。自分で意識的に努力して自分の感情を制御せよというのである。

> 私のために努力するようになどとは言っていないのよ、ハリエット。エルトン氏のことを考えないように、彼のことを口にしないようにというのは私のためにということではないのよ。あなた自身のためにそうしてちょうだい。私の安らぎよりももっと大事なことのために、つまり、あなたが自分を律する習慣を得ること、……大きな苦痛からご自分を救うということをあなたにやってもらいたいのよ[18]。

自己に対する命令で自己を制御することの重要性を指摘するのは、エマばかりではない。ナイトリーはジェイン・フェアファックスを褒めるにあたり、彼女が派手な感情表現をしないものの、実は感情豊かな人物であり、それを制御

---

[17] Jane Austen, *Emma*, ed. Richard Cronin and Dorothy McMillan, The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen (Cambridge: Cambridge University Press, 2005), p. 126.

[18] Austen, *Emma*, pp. 288-89.

し、抑えていることを美徳として指摘する[19]。『エマ』の世界は、真実と体裁が一致した状態を希求し、自己への意識の集中による自己操縦の過程である。そこでは個人の意識は常に働いていなくてはならないのであるが、それだけに絞った個人的主観の表出行動は問題を起こす。

トッドは、この作品の重要なポイントである喜劇性を生み出す要素として、オースティンの文体と言葉の使い方を挙げている[20]。オースティン作品の文体に関する議論のなかで、ここではオースティンの作品の中での文体の使い分けに注目し、なかでも主人公エマの意識に概ね重点がおかれるかたちで書かれている作品での登場人物の主観的語りのあしらい方が果たしている役割を考えてみよう[21]。

Ⅳ. 主観

オースティンの作品の中で、ナレーターの語りとは独立の、登場人物による物語の提示は重要な役割を果たしてきたが、『エマ』での登場人物による語りや、手紙は、エマの意識が作品の大方の部分を支配しているという設定に伴い、役割を変えている。『分別と多感』のブランドンや、ウィカムのように、まとまった形で人生を語りで回想する人物はここには登場しない。それどころか、個人が自らの主観的見解をできる限り完全なかたちで示すことへの不信が添えられる。ナイトリーの本心を知ったエマがその愛情に応えることができるということを明らかにするという極めて重要な場面であるので、わざわざ殊に印象づけるかたちで、個人の語りの覚束なさに関するコメントが差し挟まれる。エマが意図的にハリエットの恋心を伏せる選択をしていることを踏まえて、個人の語りはものごとの全体像を忠実に伝える真実の吐露ではないことを指摘している。

---

[19] Austen, *Emma*, pp. 311-12.

[20] Janet M. Todd, *The Cambridge Introduction to Jane Austen* (Cambridge: Cambridge University Press, 2006), pp. 94-5.

[21] たとえば John F. Burrows, "Style," in *The Cambridge Companion to Jane Austen* ed. Edward Copeland and Juliet McMaster (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), pp. 170-88; D. A. Miller, *Jane Austen, or, the Secret of Style* (Princeton, N.J. ; Oxford: Princeton University Press, 2003); Massimiliano Morini, *Jane Austen's Narrative Techniques : A Stylistic and Pragmatic Analysis* (Farnham: Ashgate, 2009); Jane Spencer, "Narrative Technique: Austen and Her Contemporaries," in *A Companion to Jane Austen*, ed. Claudia Johnson and Clara Tuite (Oxford: Wiley-Blackwell, 2009), pp. 185-94; Mary Waldron, *Jane Austen and the Fiction of Her Time* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999).

人間があかすことに、完璧な真実があることは、滅多にない。少しも偽装されていないとか、少しも間違っていないということは稀である。けれども、この場合のように、行動が間違っているにしても、感情が正しい場合には、たいして重要なことではない。エマの心は、ナイトリー氏が想定する以上に優しく、彼の心をこの上なく受け入れていた[22]。

オースティンは、人間の発言には、誤謬、恣意性、虚偽性が備わっていることをこのようにさらりと指摘する。主観的物語の構築が、会話のやりとりなどで干渉を受けずに進めることが可能な手紙では、その傾向が守られ、保持される傾向があることも彼女は看過しない。

オースティンの手紙には、18世紀の人々を魅了した手紙のスタイルに関する茶目っ気に満ちたコメントが散在する。手紙の書き方に注意を払い、書簡の手法の伝統は継承しながら、確立してしまった流行の硬直性から軽やかに脱しようとしているかのようである。1799年には、ピオッツィ夫人の文体を真似てみようと思ったが放棄すると書いている。1813年の手紙では、書簡体小説の代表的作家であるリチャードソンの作中人物のように長々と自分が書いていることに気づいたと述べ、筆をとめて自己観察してみたり、一行に二つのピリオドのある短い文章を旨とすると決意表明をしてみせる。また、「書簡の件について私の正義観念はたいへん厳格なのです」と疑似英雄体風に述べて、実際に行っているのは自分の手紙の長さを相手が書いてきた量に合わせることである[23]。

個人の心情の吐露の重要な手段として発達してきた手紙について、『エマ』の世界はその価値観を共有しない。その立場の示し方が軽妙である。エマとナイトリーは、他人の手紙にたいする詳細な判断を下すが、自分たちは手紙に依存しない。彼女と彼は、会話し、秘め事のある人々、ジェインとフランクは、さかんに手紙を書き、彼らの手紙が人々に話題を提供し、あるいは「四十回も読んで」聞かされる[24]。『高慢と偏見』のダーシーのように手紙で人生を語り、そ

---

[22] Austen, *Emma*, p. 470.
この部分は、詳細な分析が行われ、告白と感情の主体をナイトリーととり、「ナイトリー氏は現在エマに彼に対して持っている以上の優しい心、彼を受け入れてくれる情熱を求めることは無理であると思っていた」として、エマの心の豊かさというよりも限界を強調する解釈が行われている（木下善貞「『エマ』第49章の数節の分析」『ジェイン・オースティン研究』第9号、2015、pp. 16-18.

[23] *Jane Austen's Letters* ed. Deirdre Le Faye (Oxford: Oxford University Press, 1995), pp. 44, 234, 218, 208.

[24] Austen, *Emma*, p. 92.

れまで秘められていたことを明かす人物と言えば、フランクであるが、過去の「真実」を明かすための手紙の使い方は、大きく異なっている。物語の序盤では、フランクの手紙は、登場人物の間では読まれるが、読者には提示されないかたちでまずは現れる。彼の「すばらしい手紙」は、第2章でしつこいくらい同一の表現で繰り返し言及される。手紙の文面そのものは、あとから考えてみれば不自然なほど読者の目から隠されている。ただし、オースティンのことであるから、巧妙に不自然さを感じさせない設定が施され、ウェストン夫人が受け取った手紙を、ハイベリーの人々の間の噂にのせ、会話の主題にして、本体を隠してしまうのである。個人が受け取り、個人が興味をもつ手紙が文面に表れないのは理由を問いたくなるが、多くの人の噂になっているという状況を示し、中心を示さないままに周縁を膨らませて、十分に表現されていると感じさせることができてしまっている。ロバート・マーティンがハリエットに送った結婚申込の手紙も、評価の対象にはなっても、開示されない[25]。

さて、終盤のフランクの手紙は、序盤と違って、文面があらわされる。転送するにあたり、ウェストン夫人はエマが「手紙にたいして正当な評価をする」ことを期待すると書き添える[26]。当のフランクは、ウェストン夫人に「なにごとも受け入れる姿勢と甘やかして赦してくださる寛大なお心（candour and indulgence）で読んでいただけると思っています」と手紙を始める[27]。「素直さと寛大さ」を他人に要求することで、フランクは自分の手紙の自己中心性を際立たせることになる。そして彼は、ウエストン夫人が立場上自分の目的に沿った計らいをして寛大さを最も発揮してくれる人物であることを心得ている。

このような手紙について、「正当な評価」と「正義」が話題になるが、扱いは深刻でない。エマは手紙がもつ感情に訴える力を受け入れ、ウエストン夫人が言うところの「正当に評価する」配慮を最大限に発揮する結果となる[28]。ナイトリーは「正義に関わる問題であるから、正当な評価を下しましょう」と言って読み始める[29]。まず、最初はフランクの気取った筆致が槍玉に挙げられ、否定的な意見が伝えられる。彼は続けて、手紙を読み上げたり、それへのコメントを差し挟んで、エマと会話しながら読み終える[30]。彼にとって、フランクの

[25] Austen, *Emma*, pp. 52-3.
[26] Austen, *Emma*, p. 475.
[27] Austen, *Emma*, p. 476.
[28] Austen, *Emma*, p. 484.
[29] Austen, *Emma*, p. 485.
[30] Austen, *Emma*, pp. 485-88.

手紙を正当に扱うことは、「内容に応じて、微笑み、表情をかえ、頭を振り、同意するとか、賛成しないとか述べたり、愛の言葉を口にし、じっくり考え込んだあとに、真面目な結論をくだす」ことだった[31]。読者は既にエマと共に前章でフランクの手紙を読んでいるから、ここでの関心は、ナイトリーの反応にある。手紙は個人の主張を一方的に展開する場を提供することができるが、ここで重視されているのは、主観的な陳述を行うことそのものではなく、その先の、主観的見解が表出されたものをどのように扱うかということである。それは、社会的なやりとりを通じて、特に会話の中で求められ、得られていく[32]。

[31] Austen, *Emma*, pp 485-86.

[32] オースティン作品の中での会話の役割と、会話の読者への作用については、たとえば、Bharat Tandon, *Jane Austen and the Morality of Conversation* (London: Anthem, 2003)参照。

参考文献

Austen, Jane. *Catharine and Other Writings.* edited by Margaret Anne Doody and Douglas Murray Oxford: Oxford University Press, 1993.

———. *Emma.* The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen. edited by Richard Cronin and Dorothy McMillan Cambridge: Cambridge University Press, 2005.

———. *Later Manuscripts.* edited by Janet M. Todd and Linda Bree Cambridge: Cambridge University Press, 2008.

The Book of Common Prayer, Etc. Cambridge: John Baskerville, 1762.

The Book of Common Prayer, Etc. Cambridge: John Archdeacon, 1771.

Brown, Julia Prewitt. *Jane Austen's Novels : Social Change and Literary Form.* Cambridge, Mass. ; London: Harvard University Press, 1979.

Burrows, John F. "Style." In *The Cambridge Companion to Jane Austen* edited by Edward Copeland and Juliet McMaster. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.

Emsley, Sarah. "Laughing at Our Neighbors: Jane Austen and the Problem of Charity." *Persuations on-line* 26, no. 1 (2005).

Emsley, Sarah Baxter. *Jane Austen's Philosophy of the Virtues.* New York ; Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2005.

Farrer, Reginald John. *The Garden of Asia: Impressions from Japan.* London: Methuen & Co., 1904.

Grundy, Isobel. "Jane Austen and Literary Traditions." In *The Cambridge Companion to Jane Austen,* edited by Edward Copeland and Juliet McMaster. 189-210. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.

Jane Austen : The Critical Heritage. Vol. 2, 1870-1940. edited by B. C. Ed Southam: RKP, 1987.

Kipling, Rudyard. *Debits and Credits.* London: Macmillan & Co., 1926.

MacIntyre, Alasdair C. *After Virtue : A Study in Moral Theory.* 3rd ed. ed. Notre Dame, Ind.: University of Notre Dame Press, 2007.

Miller, D. A. *Jane Austen, or, the Secret of Style.* Princeton, N.J. ; Oxford: Princeton University Press, 2003.

Moore, Roger E. "Religion." In *Companion to Jane Austen,* edited by Claudia L.

Johnson and Clara Tuite. 314-22. Oxford: Wiley-Blackwell, 2012.

Morini, Massimiliano. *Jane Austen's Narrative Techniques : A Stylistic and Pragmatic Analysis.* Farnham: Ashgate, 2009.

Shapard, David M., ed. *The Annotated Emma by Jane Austen.* New York: Anchor Books, 2012.

Spencer, Jane. "Narrative Technique: Austen and Her Contemporaries." In *A Companion to Jane Austen,* edited by Claudia Johnson and Clara Tuite. Oxford: Wiley-Blackwell, 2009.

Tandon, Bharat. *Jane Austen and the Morality of Conversation.* London: Anthem, 2003.

Todd, Janet M. *The Cambridge Introduction to Jane Austen.* Cambridge: Cambridge University Press, 2006.

Waldron, Mary. *Jane Austen and the Fiction of Her Time.* Cambridge: Cambridge University Press, 1999.